

武藏野日曜集会

## 光なるロゴス

——ヨハネ伝第1章1～11節——

1994年1月23日  
小池辰雄

主の愛したもう弟子 靈言 神無き世界 光なるロゴス 無者が本当の無限者 真の光 わが愛に居

## 【ヨハネ1・1～11】

<sup>1</sup> 太初に言あり、言は神と偕ともにあり、言は神なりき。<sup>2</sup> この言は太初に神とともにあり、<sup>3</sup> 万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。<sup>4</sup> 之に生命あり、この生命は人の光なりき。<sup>5</sup> 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。<sup>6</sup> 神より遣つかわされた人いでたり、その名をヨハネという。この人は証あかしのために来れり、光に就きて証あかしをなし、また凡ての人の彼によりて信せん為なり。<sup>8</sup> 彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

<sup>9</sup> もろもろの人をてらす真まことの光ありて、世にきたれり。<sup>10</sup> 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。<sup>11</sup> かれは己おのれの国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

## ●主の愛したもう弟子

ヨハネという人は十二使徒のうちで一番年下と言われています。それで彼の福音は第一世紀の終りの頃まで続いているわけです。ヤコブと一緒にゼベタイの子で漁夫です。ガリラヤ湖でお魚を探る連中なんです。ヨハネ福音書とヨハネの手紙とヨハネの默示録、この三つを残した大変な人です。学者によつてはそれを肯定しない人も大分いますけれども、私はその通りだと思つてます。

彼は自分のことを「主の愛したもう弟子」と言つているところがある。13章23節、19章26節、20章2節以下、21章7節、20節等にそういう表現がされている。キリストはこのヨハネを非常に重要視していました。これはイエスについていた人で、最後にイエスが母親のマリヤを「よろしく頼むよ」と頼んだのは、このヨハネなんです。しかしながら、ヨハネという人は熱烈な性格の人で、「雷の子」とキリストに言われたように、非常に烈しいところがあつたようです。マルコ伝3章17節に書いてあります。



● 靈言

<sup>1</sup> 太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。

これは素晴らしい言葉です。「はじめ」という字は文語訳では「太初」と書いてある。太初に言があつた。実に素晴らしい言い方です。

「太初にロゴスがあつた」

という。アレキサンドリアの哲学者のフイロンが「ロゴス」のことを言つてますが、しかし、それから思いついたというわけでもないでしょう。ギリシャ哲学でもロゴスというのが出てくる。ロゴスというのは理性とか秩序とか、いろいろの意味をもつていますが、私はこの場合の「ロゴス」は正に「靈言」だと思う。

「太初に靈言がござる」

という訳が明治の初めの頃の聖書にあつた。そういう「靈言がござつた」という意味で、「ロゴス」といってもこれは靈的な存在です。「ペルゾナ」なんです。英語でいうと「パーソン」、靈的人格体です。それが「初めにロゴスあり」ということ。

「ロゴスは神と偕にあり」

という。「プロス・トン・テオン」（神に向かつてある）は神に対立して、神に向かつていたということ。このロゴスというのは神との対話のできる靈的人格なんです。それは暗にキリストを指しているわけです。

「アブラハムより我は先にありしなり」とキリストは言われたでしょ。「偕に」というのは、並んでいるのではない。対立している。

対話ができる。対話的な在り方です。我々はみなお話しするときに、相対している。

「初めに靈言的な存在、靈的人格がいた」

ということが「初めにロゴスあり」ということです。「言」と書いてあるけれども単なるいわゆる言葉ではない。非常に神秘的な靈的な存在なんです。

「ロゴスは神に対して、向かつて在つた」

という。「偕に」という訳し方はよくない。「神に対して在つた」ということです。そして、そのロゴスは、

「言は神なりき」

とはつきり言つている。神的な、靈的な存在であった。神と同質なんです。この第1節は凄い。



<sup>1</sup>太初にロゴスあり、ロゴスは神に対してあつた、ロゴスは神であつた。<sup>2</sup>このの言は太初に神とともにあり、

この「ともに」の訳し方は全くよくない。「神に対してあつた、向かつていた」ということ。喧嘩ではないですよ、この対するというのは。一緒に並んでいたのではない。

「このロゴスは太初に神に対してあつた」

ということ。ドイツ語では「バイ・ゴット」と訳しているが、バイもうまくない。「プロス・トン・テオン」をこんな訳し方をしたらしようがない。これが案外分かっていない。いわゆる学者の言うことなんか聞かない方がいい。「グラマトス」というのが「学者」という字ですけれども、それはダメなんだ。

「ロゴスは正に神であった。このロゴスは太初に神に対してあつた」

と。だから、このロゴスはキリストであることが暗にその言葉の中に含まれている。

<sup>3</sup>万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

正に神ですから、創造の力をもつていて。實に不思議な言葉です、この始めの方の言葉は。これは靈的人格ですから、

<sup>4</sup>之に生命あり、この生命は人の光なりき。

と。我々が光というものを知るのは全く太陽によります。ゲーテは死ぬまぎわに「もつと光を！」と言つて亡くなつた。ゲーテは非常に光を慕つた人です。光は、もちろん我々は太陽から受けとつて、そして光というものを知つたわけです。ゲーテは、

「自分はキリストと太陽の前には無条件に平伏す」

と、死ぬ二週間前に言つてゐる。ゲーテという人はやはり偉大だ。

### ● 神無き世界

日本の詩人は神無き世界で、アンダー・ゴッドでない世界はダメなんだ。日本の民主主義なんてものもそうだ。リンカーンは、

「アメリカの政府は神の下において（アンダー・ゴッド）、民の民によるところの民のための政治である」

と言つてゐる。

昨日は或る学校のPTA新年会に招かれて行つた。とにかくにぎやかだつた。けれども、いわゆるにぎやかは、私はさびしい。やはりそこに神を讃えるところの調べがないから。神無き世界だから。

神無き世界はダメだ。日本の政治もそうだ。アメリカの大統領が就任するときには、聖書に手を置いて誓う。何といつても、そういうところは違う。日本の政治家は——西郷南洲は「敬天愛人」と言つたが——「敬天」がない。まだ南洲は偉い。中国人は、絶対界の



存在を「天」という言葉で表している。自然界でも天地がある。靈界の天です。ダンテにしろ、ゲーテにしろ、みなそういう宗教的な土台をもつてゐる。宗教的な土台のないものは結局ダメなんです。仏教でもいいよ、仏教の世界は悟りの世界だけれども。如来というのは何か不思議な存在だから。宇宙靈という。

靈的存在は、人間は相対的な言葉では表現しますけれども、それはみな暗号なんです。問題は魂が本当にその靈的なものによつて活かされているか、それが事実となつてゐるか、それだけが問題です。説明の世界ではない。これが、そのロゴスなんです。靈的人格体です。

## ●光なるロゴス

「靈言がござる」

という訳は素晴らしい。實在している。靈言がござつたと。

「ロゴス存在は太初に神に対して在つた」

ということです。

<sup>3</sup>万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。

と。創造の力をもつてゐるから、

「いかなるものもこのロゴスによつて、ロゴス實在によつて成らないものはない」という。このロゴスはもの凄い靈的な生命をもつてゐる。

<sup>4</sup>之に生命あり、この生命は人の光なりき。

「生命が光である」とは素晴らしい言葉です。これも靈的な光です。高僧や何かの後ろに光背が、後ろの光が描かれているのは、實際にあれは光つてゐるんです。だから描いたんだ。想像ではない。

私の育つた無教会というのは、そういういつた靈的な事態を、神秘的な消息を嫌つた。非常に觀念なわけです。さっぱりダメだ。だから、私は無教会から出てしまつた。内村先生は始めは少しその光の世界、靈的な世界が多少あつたけれども、自分で消してしまつた。聖書の研究になつてしまつた。ダメだよ、内村先生が「研究、研究」なんて言うから。研究というものは二次的な意味しかもつてゐない。「聖書研究会」なんてダメなんだ、身体で読まなくては。

やはり、大詩人ゲーテはからだで読んでいた人です。聖書を読んでいて、そこから神の光が、力が、生命が感じられるような読み方をしなければダメです。意味ではない。意味の世界ではない。響きと靈的な視覚の世界です。

とにかく、太陽の光がなければどうにもならない。太陽の光は我々に生命を与えてゐる。大変なものだ。ゲーテは、

「太陽とキリストの前には無条件に頭を下げる」



といった。やはりさすがは違うよ。  
日本にそんなことを言つた文学者がいるかというんだ。徳富蘆花もまだちょっと手前だつた。蘇峰はダメ。夏目漱石もダメ。夏目漱石という人は人間味は豊かな人だけれども。藤村は少しそれに触っています。芥川もかなりあつたけれども、とうとう自殺なんかしてしまつた。猪牛はちょっと高慢だな。真に偉大な人はむしろ平伏しているひとです。高慢はサタンだからね。

### 5. 光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

「悟らざりき」と、おもしろい言い方を、人格的な言い方をしている。自分の暗さを本当に知れば、悟るんですけども、この暗さを知らない暗さというものは困つたものだ。中世の神秘家の中に「輝ける暗黒」という言葉がある。旧約聖書のミカ書にも似たような言葉がある。

「**我が敵人よ我につきて喜ぶなれ、我仆るれば興あがる。幽暗に居れば工ホバ我の光となりたもう。**」（ミカ7・8）

工ホバの光があるから暗きも一向差し支えないという。

女性の方は第二の国民の母親ですから、非常に大事な使命をもつていらつしやる。歴史は女性がつくつていて。だから、ゲーテが彼の詩の一一番終りに、

「永遠に女性的なるものが

我々を引き上げていく」

という句を書いた。あれは最後の句です。ダンテもベアトリーチェに引っぱられて歩いていたようなものだ。

ロゴスは光であり、生命である。「言」という語に躊躇かないでくださいよ。大変な内容をもつた「ロゴス」です。日本語で「言」なんて訳すからおかしくなってしまう。これは、「太初にロゴスあり」

と、はじめから「ロゴス」を「言」と訳さない方がよかつた。「言あり」なんて訳したらダメなんだ。日本語というのは非常に表現がたくさんあるものだから、ある一つの表現でいうと、その豊かな内容がかえつて表されなくなってしまう。

「太初にロゴスあり、ロゴスは神に対して在つた」と、「ロゴス」を「言」と訳さない方がよかつた。

### ●無者が本当の無限者

マタイ福音書は言葉の世界が非常に豊かです。マルコは行為の世界が非常に前面にでている。ルカは心の世界。最後のヨハネは靈の世界です。ヨハネ福音書というのは非常に靈的なんです。共観福音書というのはマタイ、マルコ、ルカ福音書です。同じ観かたをしている。立場がだいたい似ている。ところが、ヨハネ伝はその共観福音書とちがう。ヨハネ



伝は共観福音書に入らない。それだけ非常に靈的なものです。

<sup>5</sup>光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。

暗黒は光を受けとらない。暗黒は自分の暗黒を知らないからダメなんです。

<sup>6</sup>神より遣された人いでたり、その名をヨハネという。<sup>7</sup>この人は証のために来れり、光に就きて証をなし、また凡ての人の彼によりて信せん為なり。<sup>8</sup>彼は光にあらず、光に就きて証せん為に来れるなり。

<sup>9</sup>証には二通りある。こういうように、ケタが違うから、これは仕方がない。けれども、身証、身体でもつて証しする。自分自身がそれに成らせられる。私たちはキリストの証人と言うときには、自分がキリストと一つになつて、

「キリストの生命は、光は、愛はかくの如きものである」

ということを身体で証明する、身証する。そういう証がむしろ本当の証です。証するためには、自分がそれと同質にならなければ、証ができない。ヨハネはキリストに非常に同化された人です。でなければ、默示録なんか書けやしない。

イエス・キリスト自身が、

「自分は何もできない、何も言えない」

とヨハネ伝の中で言っている。それで、キリストは神の証人なんです。ということは、神さまを全的に受けとつたから。ヨハネ伝5章30節を見てごらんなさい。

「我みずから何事をもなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・30）

「私は神さまから聞くままにやつているんだ。聖意を求めているだけで、自分の意見なんではないんだ」と、これはキリストの言葉ですよ。

「イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』（ヨハネ5・19）

と。無者なんだ。だから、私はキリストのことを無者と言つてはいる。無者が本当の無限者に、限り無き人になる。無即無限無量というのはそのことです。神さまを受けとるから無限無量になる。自分の方に何か在つたのでは、受けとれない。無的実存とはそのことです。そういうことをキリスト教界で言つた人がないようだね。案外なものだ。

その無も、私は悟つて無になつたのではない。キリストから賜つた無ですから。キリストが、全部、私は引き受けた。お前は空っぽでいいぞ。空っぽにしてやつたぞ」と言つてくださる。罪びとでありながら、罪無きひとにしてもらつた。それが無の世界です。そうすると、聖靈がやつてくる。



「十字架と聖靈は離すことができない」

と申し上げているのはそのことです。十字架で無とされ、聖靈で無限無量とされる。だから、十字架・聖靈は離すことができない関係です。「十字架、十字架」とばかり言つていて、一向に聖靈を受けとらないご連中は観念十字架です。パウロは、

「私はキリストと共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生きたもうなり」

と言つた。靈的なキリストの生命がきたという、あのパウロのガラテヤ書2章20節の言葉は素晴らしい言葉です。

### ● 真の光

賀川先生は福音を実証した人だから、私は無教会の先生たちよりも賀川先生を本当に尊敬しています。しかし、靈の世界になると、この賀川先生はちょっとまだ足りない。

私は今、大きな詩を書いている。恐らく世界でも一番大きな詩になるでしょうね。なにしろ、私はエネルギーがきてしうがないんだ。使命を果たすまでは、私は地上を去らないから。烈々たる力が上からくるから仕方がない。パウロが言つているとおり「止むを得ざるなり」です。自分で頑張っているのでも何でもない。私はちよつとも頑張りません。自分で頑張つたら、くたびれてしまう。力は上からくる。よく「頑張れ」と言うが、私は「頑張りません、圧倒されて生きています」と言う。

暗黒が暗黒自身を知らないものだから、光が暗黒に照つても暗黒はこれが分からぬ、という。面白い言い方をしている。クリスチヤンもそうなんです。

「自分は徹底的な罪びとである」という自覚がない人は、

「まだ自分は取り柄がある」

なんて思つてゐるうちは、本当の福音の力の世界に入れない。取り柄なんかありっこない。太陽の前に、ロウソクの光が何になるか、電灯が何になるか。

イギリスの詩人のブレイクという人もなかなか神秘的な消息の分かる人だつた。イギリスのブレイク、ブラウニング。フランスのユゴー。ロシアのトルストイ、ドストエフスキイ。イタリヤのダンテ、アッシジのフランチエスコ。それに並ぶような人が日本にはいない。靈の世界が希薄なものだから。漱石さんもおしい。彼自身が嘆いてゐる。才能が豊かくらいではダメなんです。私みたいな極めて才能の無い者が逆にそういう世界に入れられる。

藤井先生の校正のお手伝いしてゐた時に、

「小池君はそのうちに凄いものを書くよ」

と言つた。先生がなぜあんなことを言つたかね。藤井先生というのは非常に詩人的な人でした。43歳で仆れてしまつて、惜しかつた。『羔羊の婚姻』という偉大な詩を書いて、未完



成で終わってしまった。

<sup>9</sup> もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。

なかなか、ヨハネという人の表現は凄い。いきなり「キリスト」と言わないんだ。「もちろんの人をてらす真の光」と言つてゐる。太陽の光だつてウソではないけれども、この「眞の光」というのは本当の靈的な光ということです。

「人を照らす眞の光が世にやつてきた」

という。「世」というのは罪の世のことです。罪の世界のことを「世」という。

<sup>10</sup> 彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。

表現が非常に神秘的だ。パウロは理屈が多いけれども、ヨハネは理屈でない。非常に神秘的な断言的な言い方をしている。ヨハネの方がパウロよりも一枚上だね。

大なる文豪は非常に表現が素朴なんです。ゲーテとシラーを比較すると分かる。ゲーテというのは大変なひとだ。ドイツで第一人者は誰かというと、文句なしにゲーテです。ゲーテの、ある土台はルッターがつくつていて。精神界ではルッターが土台をつくつた人です。ルッターとゲーテがなかつたら、ドイツはないと言つていいくらいだ。『レ・ミゼラブル』を書いたフランスのビクトル・ユゴーは大変な人です。最大文学の一つと言つてもいい。ドストエフスキイは暗い。トルストイの方が私は好きだ。トルストイは親しめる人だ。あなた方はとにかく第一流のものを読みなさいよ。第一流のものの他は読む必要はない。ダンテの『神曲』は読まなくてはな。ユゴーの『レ・ミゼラブル』、トルストイの『復活』。イギリスではミルトン、ブラウニング、ブレイク。書かれたものでは、哲学ではなく、文学です。文学が本当に眞理を渾然とあらわす。

### ● わが愛に居れ

<sup>9</sup> もろもろの人をてらす眞の光ありて、世にきたれり。

太陽の光どころではない、「これは本当の光だ」と。

「我は眞の葡萄の樹、汝らは枝なり」

とキリスト自身が言つてゐるでしょ。

「葡萄の木はあるけれども、自分が本当の葡萄の木だよ。そこらにある葡萄の木は私のシンボルに過ぎないんだ。こつちが本当の葡萄の木だ」

ということ。あいう言葉是非常におもしろい。

「我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。」

(ヨハネ15・1～2)

「この福音の世界、この私の眞の葡萄の木から枝になれ、身証せよ。我に居れ、私につながつていなさい」



ということです。

「我に居れ、さらば我なんぢらに居らん」

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」「愛に居る」というのは「信する」よりもっと強い言い方です。「私を信ぜよ」ではない。

「私の愛につながつていろ」

ということです。

<sup>10</sup>彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。世はこの創造的な彼を知らない。

<sup>11</sup>かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。

彼はユダヤの国にやつて來たけれども、ユダヤ民族はこれを受けなかつた。旧約の「モーセ、モーセ」とばかり言つて、キリストを受けとらない。「新興宗教だ」なんて思つて、キリストを迫害して、とうとう十字架にかけてしまつた。ユダヤ人は、偉大な大チャンピオンであるキリストを十字架に架げてしまつた。

12節からは、本当のクリスチヤンはこれを受けとつた。それはなにもユダヤ民族に限らない。ユダヤ人の中で改宗したのはパウロです。パウロはパリサイの権化だつたけれども、これが今度は復活のキリストにひつくり返された、

「何ぞ、我を迫害するかっ！」

と。それでパウロはひつくり返されて、キリストの第一の僕になつた。パウロの回身、というのは凄い変化だ。心の回心ではなく、身体が全部ひつくり返つた回身です。存在的にひつくり返つた。何でも全存在的でなかつたらダメです、単に心だけでは。

「復活」というのは、ただ息を吹き返したということではない。靈体として新しく現れたことです。

「血氣の体あり、靈の体あり」

と、コリント前書15章でパウロが言つているでしょ。あの靈体なんだ。

「<sup>44</sup>血氣の体にて播かれ、靈の体に甦えらせられん。血氣の体ある如く、また靈の体あり。<sup>45</sup>録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を与える靈となれり。」（コリント前15・44～45）

「終のアダム」とはキリストのことです。パウロというのはキリストにひつくり返されて、本当に福音を伝えた人だ。新約聖書の大半ものはヨハネとパウロだ、選びの器だ。

新約聖書を読んでいて、

「もう聖書は楽しくてやめられない」

という気持にならなくてはダメです。意味の世界ではないから。力がきて、光がきてしょうがない、生命がきてしょがない。圧倒されながら読む。男の人でも女人の人でも。

